

# 古文 品詞分解 「徒然草 うをりふしの移り変はる」問題

をりふしの<sup>①</sup>移り変はること、ものごとにあはれなれ。

「もののあはれは秋こそ<sup>②</sup>まされ。」と、人ごとに<sup>③</sup>言ふアメれど、それも<sup>④</sup>さるものイにて、

いまひとときは心も<sup>⑤</sup>浮きたつものは、春の氣色ウにこそ<sup>⑥</sup>あエめれ。鳥の声などもことのほかに

⑦春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草<sup>⑧</sup>萌え出づるころより、やや春深く<sup>⑨</sup>かすみわた

りて、花もやうやう<sup>⑩</sup>氣色だつほどこそ<sup>⑪</sup>あれ、をりしも雨風<sup>⑫</sup>うち続きて、心あわたたしく

⑬散り過ぎ<sup>⑭</sup>オぬ。青葉に<sup>⑮</sup>なりゆくまで、よろづにただ心をのみぞ<sup>⑯</sup>惱ます。花橘は名にこそ

⑯負へ<sup>カ</sup>れ、なほ、梅のにほひにぞ、いにしへのことも<sup>⑰</sup>立ち返り恋しう<sup>⑱</sup>思ひ出で<sup>キ</sup>らるる。

山吹の清げに、藤のおぼつかなきさま<sup>⑲</sup>し<sup>ク</sup>たる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

「灌仏のころ、祭りのころ、若葉の、梢涼しげに<sup>⑳</sup>茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の

恋しさも<sup>㉑</sup>まされ。」と人の<sup>㉒</sup>仰せ<sup>ケ</sup>られ<sup>コ</sup>しこそ、げに<sup>㉓</sup>さるものサなれ。五月、あやめ<sup>㉔</sup>ふく

ころ、早苗<sup>㉕</sup>とるころ、水鷄の<sup>㉖</sup>たたくなど、心細からシぬかは。六月のころ、あやしき家に

夕顔の白く<sup>㉗</sup>見えて、蚊遣火<sup>㉘</sup>ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕<sup>㉙</sup>祭るこそなま

めかしけれ。

やうやう夜寒に<sup>㉚</sup>なるほど、雁<sup>㉛</sup>鳴きて<sup>㉜</sup>来るころ、萩の下葉<sup>㉝</sup>色づくほど、早稻田<sup>㉞</sup>刈り干す

など、<sup>㉟</sup>取り集め<sup>ス</sup>たることは秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。<sup>㉟</sup>言ひ続くれ

ば、みな「源氏物語」「枕草子」などに<sup>㉟</sup>ことふりセにソたれど、同じこと、また今さらに

言はタジとチにも<sup>㉟</sup>あらッす。おぼしきこと<sup>㉟</sup>言はテぬは、腹<sup>㉟</sup>ふくるるわざトなれば、筆に

まかせつつ、あぢきなきすさびナにて、かつ(④)破り捨つべきものヌなれば、人の(④)見る

べきノにも(⑤)あらへず。

# 古文 品詞分解 「徒然草 うをりふしの移り変はる」 解答

ラ四体

をりふしの①移り変はること、ものごとにあはれなれ。

ラ四終 推定

ラ変体

断定

「もののあはれは秋こそ②まされ。」と、人ごとに③言ふアめれど、それも④さるものイにて、

タ四体

タ四体

ダ下二体

ラ変体

断定

いまひとときは心も⑤浮きたつものは、春の氣色ウにこそ⑥あエめれ。鳥の声などもことのほかに

カ四用

カ四用

ダ下二体

カ四用

マ四用

いまひときは心も⑤浮きたつものは、春の氣色ウにこそ⑥あエめれ。鳥の声などもことのほかに

ガ上二用 完了

タ四体

ラ変体

ダ下二体

カ四用

マ四用

りて、花もやうやう⑩氣色だつほどこそ⑪あれ、をりしも雨風⑫うち続きて、心あわたたしく

ハ四命 存続

カ四用

ダ下二体

カ四用

りて、花もやうやう⑩氣色だつほどこそ⑪あれ、をりしも雨風⑫うち続きて、心あわたたしく

ガ上二用 完了

カ四用

ダ下二体

カ四用

りて、花もやうやう⑩氣色だつほどこそ⑪あれ、をりしも雨風⑫うち続きて、心あわたたしく

ハ四命 存続

カ四用

ダ下二体

カ四用

山吹の清げに、藤のおぼつかなきさま⑯しきたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

カ四体

「灌仏のころ、祭りのころ、若葉の、梢涼しげに⑳茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の

ラ四回

サ下二用 尊敬 過去

ラ変体

カ四用

恋しさも㉑まされ。」と人の㉒仰せヶられコしこそ、げに㉓さるものサなれ。五月、あやめ㉔ふく

ラ四体

カ四体

打消

カ四用

ころ、早苗㉕とるころ、水鶲の㉖たたくなど、心細からシぬかは。六月のころ、あやしき家に

ヤ下二用

ラ四体

打消

カ四用

夕顔の白く㉗見えて、蚊遣火㉘ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕㉙祭るこそなま

カ下二用

サ四体

カ四用

めかしけれ。

ラ四体

カ四用

カ変体

やうやう夜寒に㉚なるほど、雁㉛鳴きて㉜来るころ、萩の下葉㉝色づくほど、早稻田㉞刈り干す

マ下二用

存続

カ四用

など、㉟取り集めスたることは秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。㉟言ひ続くれ

ラ上二用 完了

完了

カ下二用

断定

ば、みな「源氏物語」「枕草子」などに㉟ことふりセにソたれど、同じこと、また今さらには

ハ四末 打消意志 断定 ラ変未 打消

ハ四末 打消

ラ下二用

断定

言はタジとチにも㉙あらッす。おぼしきこと㉚言はテぬは、腹㉛ふくるるわざトなれば、筆に

マ下二用

断定

タ下二終

当然

断定

ラ上一終

べきせつ、あぢきなきすさびナにて、かつ  
べきノにも<sup>④</sup>あらば<sup>⑤</sup>。

当然

断定

ラ変末

未然

断定

タ下二終

当然

断定

ラ上一終